

ミドルクラスであること

2003年、イギリス、ダービシャーで行われたミドルクラスのワークショップにおいて、ミドルクラスの人のための国際解放照会者、ショーン・ルースの話

今朝はミドルクラスの人に何が起きているかについて少し話したいと思います。

私たちはミドルクラスの傷の影響によって、自分はこれで良いと思えるときがほとんどありません。だから、私がミドルクラスの人につねに言っているのは（それも、何度も繰り返すべきなのは）、ここでこうしていなくてはならないなんてことはないんだよ、ということです。どんなふうに見えようと、どんなふうと話そうと、どんな傷を持っていようと構いません。その場にいることを正当づける必要はまったくないので。試験に合格する必要もないし、調子が良いふりをする必要もありません。ミドルクラスっぽく見えなくする必要もありません。

つねにチェックしつづける

私たちの多くは自分が抑圧されていることに気づくことができません。私たちの多くが「ミドルクラス」として育ったことは特権であったと思っています。しかし、私たちは安心感を得るために毎日、分刻みで何かをしなければなりません。それを私はますます感じるようになっていきます。私たちミドルクラスの間は、自分のまわりで起きていることすべてをつねにチェックしています。つねに様子をうかがい、「この人は私に何を望んでいるのだろうか？ この人を良い気分にならしてあげるにはどうしたらいいのだろうか？」と考えようとします。何を期待されていて、どんな決まりごとがあって、それを自分が破っていないかどうか（笑）をつねに考えようとします。「何か問題を起こしてない？」「私の気づいていないことが起きてない？」こんなふうに際限なくチェックします。間違っただけを言わないように、間違っただけをしないように、だれかの機嫌を損ねないようにつねに気をつけています。だれかに気づかれることをひどく恐れています。そして、だれかがそこにいることにまったく気づきません。ミドルクラスの間である私は、ほんとうに必死に努力しないと、自分のためにだれかがそこにいるということがわかりません。

わかることはめったにありません。せいぜい私が期待するのは、相手に十分なことをしてあげれば傷つけられることはない（笑）、距離をおいてくれる（笑）ということです。相手を良い気分にならしてあげれば彼らを遠ざけておくことができます。相手に近寄られると何かしら非難されます。こうした傷がつねにまわっていて疲れ果ててしまうのです。そういうことはもうやめようという気には決してならないようです。そうすることをやめ、いまが安全で、そこにだれかがいるということに気づくことができません。

RCの「ルール」

RCを始める前、私はたくさんの自己開発ものに手を出していました。RCを見つけたときはほんとうにほっとしました。すべてのことに「ルール」があったからです（爆笑）。どうやって会話を始めたら良かにルールがありました（笑）。制限時間が決まっていた（笑）。話をやめなければならないときが来るとタイマーが鳴ります（笑）。だから次は自分が聴く番だということがわかって、どちらが話を聴くかということに頭を悩ます必要がありません。そして何といてもすばらしいのがこのルール——会話が終了したら、ただちにその場を離れます（大爆笑）。お茶を一杯一緒に飲む必要もありません。それからもう一つすてきなルールがあります。そこにいる人のだれとも社交する必要はありません（笑）。これにはほんとうにほっとしました。

人々の安全を考えてつくられたこうしたルールは、私たちミドルクラスの人々の傷を再演させる引き金にもなっています。私たちはこうしたルールを、自分以外の人がいることに気づかなくてもいいという意味にとることができます。いまはこの人が聴く番というふうにルールで決めているので、私たちはその人に注目せずに、その人が実際に聴いていることを意識せずに話すことができます。私たちの多くはクライ

エントのとき、自分で自分をカウンセリングします。そして、だれかが注目しているということを意識せずにディスチャージしようとしてします。私たちはカウンセラーをあまり見ようとしません。それは一つには、自分の話はだれも聴けないと思っているからです。それと、見てもそこにカウンセラーはいないと思っているからです。

自分を見せない

私たちはクライアントのとき、「このカウンセラーは何を望んでいるのか？ このカウンセラーを良い気分させておくことはできるか？」ということをつねに考えようとしてします。「方向性がほしい。クライアントである私が何をしたらいいか教えてほしい。どうすればあなたが良い気分になるか知りたいから」と私たちは考えます。そしてカウンセラーのときは、「このクライアントは私に何を望んでいるのか？ このクライアントを良い気分させておくために何ができるか？」ということを考えようとしてします。際限がありません。そしてほとんどの場合、だれかがそこにいること、ずっとそばにいてくれることに気づくことができません。だれかが私たちに気づいたとしても、その人がずっと一緒にいてくれるとは全然思えないのです。だから私たちはたいいひどく恐がっています。そしてそのことを必死になって隠そうとしますが、あまりうまくいきません。私たちは自分を見せないことで生き延びてきました。私たちは相手が何を望んでいるかを考え、それをするので生き延びてきました。

ですから、私たちのほとんどはどうやって自分を見せたらよいか分かりません。そして自分の一部をうっかり見せてしまうたびに恐怖を覚えます。私はそのちょっとした事例に先週出くわしました。修士号を取るために勉強している成人の大学生のグループと仕事をしているときのことで。グループのほとんどはミドルクラスでしたが、ワーキングクラスも2、3人いました。休憩中に一人のワーキングクラスの学生がこう言いました。「大学で勉強しているとき、この人たちが何度も私のところに来て、君はあけっぴろげすぎるって言うのよ」その忠告は「彼女のためを思って」言われたものです。私たちは生まれてこのかた「何も見せてはいけない」とずっと言われつづけてきました。考えてみれば、「自分自身を決して見せられない」「安全だとは決して思えない」「つねにまわりの人が望んでいることを知ろうとし、相手にそれを与えることばかり考えていなければならない」ということを守って生きていくのはたいへん辛いことです。しかもそれと同時に、「自分は抑圧されていない。自分は簡単にこなしてきた。自分には特権があった」というメッセージも聞こえてきます。これにはほんとうに混乱させられます。

ミドルクラスの傷にばかり注目する

RCにおけるミドルクラスの最初の取り組みでは、ミドルクラスの傷にばかり注目する傾向がありました。傷にかんして、たいいグループでは受け入れ難いような議論が、ミドルクラスでは当然のように行われていました。一般に、ミドルクラスの人に傷がどこにあるかを伝えることは、コントラディクションになると思われていました。しかし私たちはミドルクラスであるために、「そうか。私たちがしなければならないのはそれなんだ」と考え、ミドルクラスの傷に対する取り組みをすぐに始めました。それが自分たちを変えるきっかけになると考えたからではなく、ワーキングクラスの人がそれを必要としたからです。「どうすればワーキングクラスの人にあれこれ言われずに済むのだろう。よし、あの人たちは何と言ってる？ 私がふりをすればいいと言ってる。よし、それじゃ、ふりをしなかったらどんなふうに見えるだろう？」(笑) こうして私たちはふりをしないふりをしました。そして、そこから何かを得られるだろうと思ったからではなく、それがワーキングクラスの人々を満足させるだろうことを願って、何年もミドルクラスの傷に取り組みつづけたのです。

もう一度つながることができる

私たちは傷にばかり注目したためにワーキングクラスの人々から引き離され、ミドルクラス同士でも断されました。ミドルクラスの傷に取り組み始めた最初のころ、私たちがこの取り組みをするのは、ワーキングクラスに帰り、ワーキングクラスの人々をつながり直すためというのが前提の一つでした。ほかのミドルクラスの人々をつながり直すことについてはまったく考えませんでした。それは目標に到達するた

めに仕方なくやらなくてはならない一過程にすぎませんでした（笑）。「その目標にたどり着くためにはサポートグループに出てほかのミドルクラスの人と会わなくちゃならないって？ なるほど、了解（笑）、必要ならそうしましょう」しかし、いま私たちはもう一度互いにつながり直せるときにいます。ミドルクラス同士のつながりを取り戻さずにワーキングクラスの人々とつながろうとすることは、すべての人の力を見くびることになるといまはわかります。

私たちの多くは、ほとんどの時間、すべての人がうまくいくように懸命にこころを配ろうとしています。私たちは人々に何が必要であるかを考え、みなぎそれを手に入れられるように行動しようとしています。私たちは人々が安心して、喜んでもらえるように配慮しようとしています。多くの場合、私たちはそれを互いにつながりを持たずに行おうとします。私たちが内面化された抑圧によって行ったことの一つは、ミドルクラスの特別深い傷を持った人を非難したことです。そうした人のほとんどは RCer 以外の人で、たとえばやたらと気取った人やひどく礼儀正しい人、決して本心を明かしそうにない人や自分自身を見せようとしません。私たちはそうした人々をパターンを持っていると言って責めました。けれども、そうした人々を見れば見るほど、彼らが孤立という大きな重石の下から必死に這い上がろうとしているのがわかります。彼らも私たちと同じように、つねに人に喜んでもらうために行動しています。自分に注目がもらえるとは思っていません。私たちは彼らのパターンにいらつきます。彼らの礼儀正しさやよそよそしさにいらつきます。私たちは彼らが何も見せようとしなかったことやこころをひどく閉ざしていることにいらつきます。しかし、それが彼らが生き延びるために必要と考えたことなのです。それだけ抑圧が深かったということなのです。

指標となるものがなかった

ワーキングクラスの人はおとなになってミドルクラスの仲間入りをするとき、しばしば恐怖を感じます。また、ミドルクラスの傷の壁にぶち当たって激しく怒ることもあります。しかし、生まれつきミドルクラスだった人とおとなになってからミドルクラスの仲間入りをした人のあいだには、一つだけ違いがあります。おとなになってからミドルクラスの仲間入りをしたワーキングクラスの人には、ワーキングという比較対照できる経験を持っています。ミドルクラスとして育った私たちは、その計り知れない深い傷を生まれてから少しずつ受けつづけました。ワーキングクラスの人がミドルクラスの傷にぶつかったときの反応を見ると、その傷がみなさんにとってどれほど恐ろしいものだったかがわかります。私たちはその傷を一度に受けたわけではありません。徐々に受けてきました。指標となるものがいっさいないままで。

わからない、間違える、びくびくする

抑圧の影響によって私たちは自分自身について混乱し、まわりの人がどうしているかということばかりに注目するようになりました。それを知ることが自分の安全のために必要と感じたからです。そのために私たちは自分を見せることを苦手とし、ひどく恐れるようになりました。それに抗って自分を見せようとしても、そもそもそのやり方を知りません。そしてそのやり方を知らない自分をまた責めます（笑）。しかしどうしたら知ることができたのでしょうか。抑圧の影響を考えたら、自分を見せる方法など知るすべもありません。私たちはその方法を知っているふりをすることによって、何とか生き延びていけるように思えたのです。

このところ私は自分自身に対して正直でありつづけることについて多くのことを考えています——他人に対して正直になることではなく、自分に対して正直になること、そしてそれがどういうことなのか、ということです。多くの場合それは、わからないということに対して正直でいることです。私には何もわかりません。私たちはそのことに混乱します。私たちの多くは教育を受けてきたからです。私たちは頭が良いと言われました。多くは高学歴です。にもかかわらず、実生活の重要な場面で私たちは徹底的に混乱させられます。そうした重要な場面では、たいてい自分が馬鹿になったような気分になります。これには混乱させられます。馬鹿と言われたことがないのに、馬鹿のような気分になるからです。

どうやって人に近づき、自分を見せたらいいかについて、その手がかりもないことに気づきながら、そ

のやり方を見つけださなければならぬことも難しいことの一つです。しかしそれでいいのです。手がかりがなくても構いません。わからなくていい。そんなふうを始めればたぶん見つけられるはずで、私たちは困っているところを見られるのを恐れています。ほとんどの場合、恐怖のあまり何が困難なのかわからずにいます。

ミドルクラスの人々はいろいろな場面でふりをするということについて責められてきました。まるで私たちがわざとそうしているかのようです。傷のせいではないかのようです。どうやって自分を見せたらいいかを見つけだすことも難しいことの一つです。人々は私たちがふりをしていることに気づきますが、それはたいい恐怖を覆い隠すためでした。私たちは決してわざと自分を隠そうとしているのではありません。何かの目的のために意識的にしてきたのではないのです。私たちは恐怖を感じ、混乱してきました。私たちは混乱を見せないようにすることを学んできました。

ですから、このワークショップの目的の一つは、自分を見せ、自らに課している期待という肩の荷を降ろすことです。互いに間違いも犯しますが、犯した間違いを責めたりしません。自分がほとんどの時間、恥ずかしさを感じていて、内気で、びくびくしていることに気づく必要があります。困難な状況に陥ったときに自分を隠さないことも課題です。困難とともにいつづけ、ただただ不安を感じ、決してそれを隠さないでいる方法を見つけることです。

完全に良い人

最後にもう一つ。私たちはこれらすべてのことを、自分が完全に良い人であるというはっきりした視点のもとに行う必要があります。私たちの多くが途中で見失ってしまうことの一つが、自分は完全に良い人で、何一つ謝らなければならないことはないということです。私たちは何も悪いことはしていません。生き延びるためにしなければならないことがあったとしても、そのことで自分を責める必要はありません。私たちはともに、自分自身をほんとうに好きになる道を見つけることができます。自分をあまり見せようとしないミドルクラスの人を好きになることもできます。彼らの胸の底には大きなところが潜んでいることをよく知っているからです。まさにその通りなのです。ミドルクラスの人を見れば（私は典型的なミドルクラスの人を思い浮かべています）、真剣にその人を見れば、その人に耳を傾ければ、彼らが大きなところを持っていることがわかります。彼らはその大きなところをどうやって見せたらいいかわからないだけです。しかしそれさえも真実ではありません。彼らも自分を見せています。私たちが気づいていないだけです。ミドルクラスの人々はだれもが完全に良い人です。自分について喜べないことがあれば、それはすべて傷であるはずで、

Being Middle-Class

プレゼントタイム 2007年7月号 42 - 45 ページより

Seán Ruth

翻訳 高坂明雄

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります（翻訳 2008 年。原文 2007 年）。

この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。